S.　Ashina

オリエンテーション――ヘレニズムとヘブライズム
１．存在論と聖書
２．創造――フィロン、アウグスティヌス
３．契約――社会契約説
４．知恵――カント
５．堕罪・悪――リクール
６．歴史――ヘーゲル
７．神の国と終末――アウグスティヌス、ヨアキム　5/28
８．愛――パスカル　6/4
９．自己――キルケゴール　6/11
１０．死――ハイデッガー　6/25
１１．永遠――波多野精一　7/2
１２～１４．受講者の研究発表　7/9（田中吉隆、ブラジミロブ　イボウ）
7/16（張 舒青、平出貴大）, 23（齋藤伎璃子、立川瑛世）

＜前回＞堕罪・罪
（１）悪と告白
１．創造・契約・知恵　→　広義の合理性（自然法則／道徳法則）
直観、現象学→本質
２．現実：合理性と非合理性の曖昧な結合・混合（ティリッヒ：Zweideutigkeit, ambiguity）
↓
非合理的なものをいかに言語化・語るのか
悪・不幸・罪、神秘・超越・聖なるもの
３．図式化：オットー『聖なるもの』
４．告白あるいは神話：リクール
（２）悪と神話、解釈学
５．神話→解釈学
６．エデン神話に基づいて考えるとき、罪はどこからやってきたことになるのか？
・神話という語り方の意義（言語的文学的機能）
解釈の多様性を残しつつ、解釈を促す（リクールの悪のシンボリズムの研究）
・ヘビ：善悪二元論
女：身体・欲望＝悪
男：自由意志論
神：神義論
↓
キリスト教的悪論の可能性
自由意志：
哲学的意志論のキリスト教的源泉（アーレント『精神の生活　上下』岩波書店）
有限的自由（可能性）とその現実化（ティリッヒ）
過ちやすさ・脆弱性（リクール）
『不安の概念』と『死に至る病』
７．罪と悪
人間の行為と自然的過程との区別あるいは連関

（３）神義論
８．悪論：どんな悪を念頭に置くのか。

９．ライプニッツ『弁神論』　　cf.　シェリング
・悪の実在の現実、最善なる神が創造した最善の世界。
　悪はその世界の内部でより大きな善のためにのみ許容され存在する
　　悪の現実の消極的理由、予定調和
・自然的な悪（苦痛）、道徳的な悪（罪）、形而上学的な悪（不完全性）
　　欠如としての悪
　　完全化の過程における悪
10．神義論（弁神論）
　・何が求められているのか
　　理論的な理由づけ・説明が問題なのか、あるいは過去への回帰・復元か
　　慰め・癒やしとは？
　　関係の回復、見出された意味
　・全能性を弱めることは可能か：弱き神
　　ホワイトヘッド、ヴェイユ、ヨナス
　　シェーラー、ハイデッガー、ヴァッティモ　　cf. ティリッヒ
11．ヨーナス『アウシュヴィッツ以後の神』（モルトマン、北森嘉蔵）
「無関心な死んだ永遠ではなく、時とともに積み重なる実りによって成長していく永遠」
「苦しみ、生成する神」「気づかう神」（18）、「この身にリスクを抱えた神」（19）
「この神は全能の神ではありません」、「全能の力とは自己矛盾、自己否定、無意味な概念」（20）
「〈力〉とは関係概念であって、複数の極からなる関係を必要とします。だとすれば、相手のなかの抵抗と出会わない力は、およそ力がないの同然です。力は力をもつ相手と関わることで発揮されます」（21）
「神の全能は絶対で無限であるという考えについては、このように論理的存在論的な異論があります」、「神の全能と神の善性とを両立させるとすれば、それとひきかえに、神をまったき測りがたきものに、つまりは謎にせざるをえません」（22）
「完全な善と全能とを神に帰するとすれば、神はまさに完全に隠れた、理解できないものであらざるをえないでしょう」（23）
「神は理解可能で善であり、それにもかかわらず、世界には災いが存在する、と」、「私たちは全能の概念を疑わしいと認めたのですから、消し去らなくてはならないのはこの属性です」（24）
　　↓
「神の力を限定されたものとみなすべきだ」「神の側からの譲歩」（24）
「神は沈黙しました」、「神はそれを欲したからではなくて、そうできなかったから、介入しなかったのだ、と」（25）
「神が力を断念したのは、ひとえに人間の自由をゆるすためです」（26）
「ルリアのカバラのなかの宇宙論の中心概念であるツィムツム（Zimzum）の考え」「収縮、退却、自己制限」（27）
「神にはもはや与えるべきものはありません。いまや、人間のほうが神に与えなくてはなりません」（28）
「神的な冒険の運命は私たちの移り気な手のうちに、つまりどう形容するにしても万有のなかのこの地上の片隅にゆだねられており、それに応える責任が私たちの肩にかかっている」、「創造の意図を無にしてしまうこともまた、私たちの手中にあることは疑いえない」（105）、「宇宙規模でなされたの実験」（106）
「エティ・ヒレスムが遺した日記」「一九四三年に彼女はアウシュヴィッツでガスによって殺された」、「「神が私をこれ以上助けないなら、私が神を助けなければならない。・・

・・私はできるかぎり助けるようにいつも努めよう」」（107）

６．　歴史――ヘーゲル

（１）歴史という問い

１．人間的現実としての歴史とその多義性

存在論的構造／伝統・思考方法／時代動向

人間存在の歴史性（すべての文化圏・民族は歴史を有する）。

キリスト教は歴史的思惟を特徴とする（ほかの伝統との対比）。

近代化は歴史化である。

２．西欧近代と歴史主義

近代化は歴史化である。　→　歴史相対主義へ

価値や制度などが歴史の文脈で形成されたということの意識・自覚。

自然主義と歴史主義という対をなす思考形態成立（トレルチ『著作集９、10』ヨルダン社）。

「「近代化」の存在論的性格は《歴史化》と呼ばれるものであり、近代世界を貫いた社会変動は」「「自然」からの「自由」という性格をもっていること」、「「自由」の介入によって「自然」が「歴史」化する過程」（大木英夫『新しい共同体の倫理学　基礎編上』教文館、47）。

３．ティリッヒ「われわれの時代の根本問題としての歴史」（1939）（『著作集8』白水社）

「この問いの統一が歴史のなかの一時代に性格を与える」、「その歴史的状況がもっている根本的問い」、「何がわれわれの時代の問題そのものであるのかというすべてを包括する問い」

「この問いに対する私の答えは、それは歴史である」、「それはわれわれの歴史的実存である」（218-219）。

（２）法則性と自由

４．ヘーゲル：絶対精神の自己実現と英雄。理性の狡知。

「歴史的人物、世界史的個人とは、このような普遍をその目的の中に蔵しているような人々」（『歴史哲学　上』岩波文庫、96）、「これらの個人は、その目的の中に理念一般に関する意識をもっていたのではなかった。彼らは実践人であり、政治家であった。しかし同時に、彼らは時代の要求と時代の趨勢とについての洞察をもつ思想家であった」（97）、「情熱の特殊的な関心と普遍的なものの実現とは不可分のものである」、「特殊なものは、互いに闘争して、一方が没落しつ行くものにほかならない。対立と闘争に巻きこまれ、危険にさらされるのは普遍的理念念ではない。普遍的理念は侵されることなく、害われることなく、闘争の背後にチャンと控えている。そしてこの理性が情熱を勝手に働かせながら、その際に損害を蒙り、痛手を受けるのは[理性ではなくて]この情熱によって作り出されるものそのものだということを、われわれは理性の狡知（List der Vernunft）と呼ぶ」（101）。

「神が世界を統治するのであって、その神の統治の内容、神の計画の遂行が世界史である。そうして哲学は、この計画をつかもうとする。というのは、この計画に基づいて実現されたもののみが現実性をもつのであり、それに外れたものは単に腐った実存（faule Existenz」にすぎないからである」（107）。

５．マルクス：世界史の法則性と人間の自由。

・「無名の存在を現実的基盤として理解する」、客観主義的、構造主義的な解釈。古典的な正統マルクス主義の立場、諸個人を完全に括弧に入れる。

共産主義社会は歴史の必然性において成立する。客観的法則の自動的な展開。

・「諸個人の役割の優位性」。革命家の主体的な歴史参与の必要性。（リクール『イデ

オロギーとユートピア――社会的想像力をめぐる講義』新曜社。第五回、第六回）
cf.　ティリッヒのマルクス論

６．レーヴィット：キリスト教的歴史観の世俗化としてのヘーゲル、マルクス。

「この市民的キリスト教的世界のキリスト教が既にヘーゲル以来、特にマルクスとキェルケゴールによって最後になったからと言って、もちろん、かつて世界を征服した一つの信仰がそれの世俗化した姿の最後のものと共に老衰したということには、ならない。じっさい、この世におけるキリスト教の巡礼が、一度も故郷としてすんだことない所で、どうして故郷を失うということがあり得ようか」（レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへII』岩波書店、213）。

the following outline aims to show that philosophy of history originates with the Hebrew and Christian faith in a fulfilment and that it ends with the secularization of its eschatological pattern.（Karl Loewith, *Meaning in History*, The University of Chicago Press , 1949, p.2. cf. Ｋ．レーヴィット『世界と世界史』岩波書店、『歴史の意味』未来社。）

（３）キリスト教的思想の文脈で

７．自由意志と神の恩恵：パウロ→アウグスティヌス→ルター
予定・摂理

８．自由意志の擁護と原罪概念
ペラギウス論争、セミ・ペラギウス
ルターの奴隷意志論、エラスムスとの自由意志論争

９．賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009年。（Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.）

「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることそれ自体が人間の活動を要求する」、「神の呼び起こされた愛の結果」（45）

「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「愛の可能性への信仰」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない」、「おのれの神信仰が言葉だけの皮相な信仰にとどまる、自己中心的な人たちがいる」、「神の創造の業、とくに人間を愛し得ないなら、その愛は自己矛盾を抱えている」（46）

10．神の恩恵が自由意志を可能にする、という仕方での解決。
→　神のリスク（弱い神）と人間の責任。

＜参考文献＞

１．ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』平凡社。
２．W．イエシュケ『ヘーゲルの宗教哲学』早稲田大学出版部。
３．加藤尚武編『ヘーゲルを学ぶ人のために』世界思想社。
４．権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』岩波書店。
５．シュネーデルバッハ『ヘーゲル以後の歴史哲学』法政大学出版局。
６．安酸敏眞『歴史と解釈学――《ベルリン精神》の系譜学』知泉書館。
７．金子晴勇『キリスト教思想史入門』日本基督教団出版局。
『ルターの人間学』『アウグスティヌスの人間学』創文社。
８．山田望『キリストの模範――ペラギウス神学における神の義とパイデイア』教文館。